

各舟の魚は
湖水に游がず？



吞舟の魚は湖水に游がず？





「え？ あれって姫じゃないの？」

私と蛭奇が思わず口にした疑問は、一字一句まで寸分たがわず同じだった。

霧の湖の畔の岩場を会場にしたお茶会は、我らが草の根妖怪ネットワークの定例会合だ。参加者はいつもの通り、人魚^{マーメイド}のわかさぎ姫、ろくろ^{デューラ}首^{ヘッド}の赤蛭奇、そして私こと人狼^{ルンガレ}の今泉影狼の三名。お茶をしたり、お喋りをしたり、姫の綺麗な石コレクションを眺めたり。そんな妖怪女子力溢れる会合である。

「違うわよ！ っていうかかげろーちゃんも蛭奇ちゃんも、わたしのことそんな風に思ってたの?!」

カボチャのランタンの灯りに照らされて、姫はひどくご立腹だった。里で評判のパンブキンビスケットをもぐもぐと頬張りながら、水面に出した尾びれを力強く振って抗議してくる。飛んでくる水飛沫に身をすくめ、テーブル代わりの岩の上から残ったお菓子を慌てて避難。

「もうっ。又シ様はそんなのとは違うのよ！ 一緒にしたら失礼でしょう!」

姫の剣幕に揃ってごめんなさいをするネットワークの残り二名。概ね私たちの力関係はこんなものである。

さておき、ヌシ様である。この霧の湖に住むという正体不明の巨大魚の話は、人間たちのみならず妖怪たちの間でも伝わる伝承だった。

人里では幻想郷の七不思議の一つとして語られる存在であり、風のない新月の夜にだけ湖面近くに姿を見せるという。その大きさはなんと十尋（18メートル）にも達するという。

そのヌシ様が大変なのだという姫の話に、私たちが返した反応が冒頭のものであった。「てつきり、姫が新月の夜に本性に戻ってるのかと思ってた」

「蛮奇ちゃん。わたしあんなに大きくないわよ。かげろーちゃんじゃあるまいし」

「……私も好きで毛むくじゃらになってるわけじゃないのよ？」

なおもご立腹らしい姫は、ぷくうつと頬を膨らませて首後ろの鰓を震わせる。妖怪にとつて『大きい』ということは多くの場合、歳経た存在であることとイコールである。それは得てしてステータスであったりするものだけど、姫は違うらしい。まあ、真正面からでっかい大きいと言われて、乙女心がどう感じるのかというとその辺はいろいろ複雑である。

姫にお茶のおかわりを振舞いつつ、斜めになった御機嫌を宥めて先を促せば、なんでもこの湖のヌシを釣り上げようとする連中が、最近とみに増えてきているのだという。「本当、迷惑してるのよね……」

ヌシの噂自体は決して最近のものではなく、随分前から耳にするありふれたものだ。新月の夜ともなればそれこそ何年も前から太公望を気取る人間たちがぼつりぼつりと釣

竿を抱えて姿を見せていたが、それが最近やけに活発化してきているという。

「やつぱり、河童がネツシーの見世物とかを始めたのがよくないと思うのよ」

言いながら姫が水中から取り出すのは完全防水対応の新聞。山の天狗が販路拡張のため、水中の妖怪にまで購読ターゲットを広げているというのは聞いていたけれど、姫も購読中だとは知らなかった。

紙面には無責任に好奇心を煽るような文体で、湖に住む巨大生物の噂が書き立てられている。昨今のオカルトブームに便乗したものだろうか、普段から胡散臭い文体がなお怪しさを

増していた。……悔しいことにちよつとばかり興味をそえられる。

そんなわけで、夜の湖には以前にも倍して人間たちが訪れ、船まで出してヌシを探す始末。姫や魚たちは毎夜毎夜騒がしくて難儀しているのだという。

「この間だって釣り針ひっかけられそうになつてね、大変だったのよ」

「そのまま釣り上げられてやつたら、案外人間たちも諦めるんじゃない？」

「もうっ、他人事だと思つて！」

受け取った新聞を広げる蛮奇の横で、姫は頬杖付いて大きく溜息。

今のところ太公望氣取りが坊主になつてばかりだが、中にはマナーの悪い連中が短気を起こして、湖に石を放り投げたりもするのだとか。

「ねえ。今の話聞いてて思ったけど、ひよつとして姫もヌシの正体は知らないのかしら？」
「うん。ここの魚たちはみんな、ヌシ様のことを尊敬してるけど。普段はどこにいるの

かまでは知らないのよ。なんて言えばいいのかしら、畏れ多くて」

なんとなく詮索してはならないような気がして、と付け加える姫。その気持ちはなんとなくわかる。妖怪にとつて正体や真実の姿というのは、時に命にかかわる弱点になるためだ。

この湖、立地も相まって幻想郷ではよく知られているものの、伝え恐れられているほど広大なものではない。ぐるりを一周するのにゆっくり歩いてても半刻^{時刻}もかからない程度だ。晴れている日なら対岸を見通すのだって簡単である。

けれど、定期的に出る魔法の霧のせいで、実際の大きさは釣り合わない複雑さも抱えていた。水深は深いところで数十メートルもあり、水底には岩が入り組んでいて、姫ですら湖の中のこと全部はわからないのだとか。流れ込む河も出ていく河も一つではないし、地下水脈になつている場所まであるというから驚きだ。

ヌシが新月にしか姿を見せないというのであれば、普段は別のところで暮らしていたり、その時以外は違う姿でいるのかもしれない。……てつきり、私は姫がそうなのだろうと思ひ込んでいたのだけだ。

「どうしよう、かげろーちゃん、蛮奇ちゃん。もし、もしもだけど、ヌシ様が人間に釣り上げられちゃったりしたら……！」

「まさかあ」

一笑に付してみたものの、絶対にありえないかというところ、そんな保証はもちろんない。何があるか分からないのが幻想郷だ。『なんでも釣り上げることのできる能力』なんての

が名乗りを上げたっておかしくない。

「……それにね、あれ」

姫は、霧の向こうに見える紅いお屋敷を示す。吸血鬼とそれに従う者たちが暮らす湖畔のお屋敷には、湖に向けて大きな栈橋が伸び、急ごしらえのプレハブとごつい足場が組まれている。ちよつとした一軒家なら丸ごと取り囲んでしまえそうな大きな銀色のシートが張り巡らされ、夜風にばたばたと揺れていた。栈橋には夜中だというのにマダネシウムの神々しい光がとまり、騒がしい工事の音がこまで聞こえてくる。

「あー……何やってるのかと思ってたけど、そういうことね」

人間たちの間で噂が広まれば、必然、それは妖怪の耳にだつて入る。

お屋敷の主である吸血鬼が湖の主のことを聞きつけたのはそんなに前のことではないらしい。自分の領土の目と鼻の先である湖に（これは彼らの一方的な言い分であるけど）住んでいるというのに、一度も挨拶にも来たことのないヌシを不満に思った吸血鬼は、湖の底を調べるための潜水艇を作らせているのだった。まったく、いかにも吸血鬼らしい傲慢な物言いだ。泳げないくせに。

作業にあたっているのは河城大工房の河童たち。昼夜を押しての突貫作業らしく、もうずつとあんな様子だという。どんな経緯があつたかは想像に難くなく、目を付けられた河童たちにもちよつと同情したくなった。まあ、河童たちも商売ことには節操がないので、自業自得なのかもしれないけど。

「あんな機械の船で湖を荒らされたら、みんなの住むところがなくなっちゃうわ。ヌシ

様だつて怪我するかもしれないし」

吸血鬼はとても好戦的で乱暴だ。尊大と傲慢が血を吸つて歩くような奴らであり、自分に礼を尽くさないと相手とわかれれば、いきなり攻撃したつておかしくない。彼らの氣まぐれで酷い目に遭つた妖怪^{なま}たちはたくさんいる。

まあ、ああいう大物が派手に暴れて目立つてくれているので、私たちのようなひっそりと暮らしている妖怪たちにはその分注目が集まらず、呑氣にやつていける側面もあるんだけど。

「なんとかならないものかしら」

「うーん……」

「そうねえ……」

思わず、蛮奇と顔を見合わせて腕組み。姫の頼みとはいえ、こればかりは難題であつた。そもそも私は狼で蛮奇はろくろ首。水の中のことはまったく不得手なのである。姫にできないことが私達にどうにかできるかというところ、非常に怪しい。

「なんとかつて言つてもさ、姫だつてヌシがどこに暮らしてるとか、どう考えてるのかなんて知らないのよね？ それでどうしろつて言われても」

「知らないっていうか、会えると思わなかつたの。かげろーちゃんだつて、竹林に長くいるけど兎ちゃんたちのお姫様に会つたのって最近なんでしょう？」

「まあね」

自分と違う妖怪に会うことは、それだけで面倒のもとだ。これは困つたことに真理だ

った。多くの場合、妖怪というのはお互い相容れない。知らずにいればそのまま一緒に暮らしていったものを、余計なことを知りすぎてしまったせいでどちらかが出ていかなければならなくなったりすることだつて珍しくなかった。

竹林でたまに行方不明になる兎と、おなかを空かせた人狼の関係とか。藪をつつかないほうがいいことはたくさんあるのだ。

「なんにせよ、そのヌシさんに会つてみないことにはなんとも言えないんじゃないの？ 姫の頼みだしなんとかしてあげたいけど、陸の妖怪が湖のことを勝手に口出しするわけにもいかないし」

「うーん、そのへんは大丈夫だと思ふのよね。ヌシ様だつて釣られたくないはずだし」
「でも、どうにかつて言つたつて水の底じゃない。私も少しくらいは泳げないことはないけど、湖の底なんてとても息が続かないし——」

「それならまかせて！」

姫はぱんと手のひらを叩き合わせるなり、ぐいっと身を乗り出していきなり私たちの手を掴んだ。あ、と思う間もなく私と蛮奇は湖の中へと引きずり込まれる。

「つ——!？」

暗い水面が眼前に迫り、ざばんという衝撃が全身を押し包む。夏の終わりかけだというのに、湖の水はひどく冷たかった。月明かりも通さないぞつとするほどの重さが服の上から絡みつき、水圧が喉を締め上げる——

「……あれ？」

姫の手を振りほどきもがこうとするうちに、すぐに私は異常に気付いた。

息ができるし声も出せる。服も少しばかり湿っていたけれど、特に濡れている様子もない。ふわふわと落ち着かない足元によろけながら顔をあげれば、私は自分の周りを取り囲む大きな泡のようなものに気づいた。

すぐ隣には同じように泡に包まれて目を回している（首ごと）蛮奇の姿。その向こうで、姫は手にしたカボチャのランタンを、ふうつと吐き出した泡で包む。ぼんやりと光を放つウィル・オー・ウィスプの輝きの中に、ようやく私は状況を理解した。

「……ねえ姫、今度からやる前に教えてくれないかしら」

「びっくりした……」

「？ そうなの？」

よくわかっていない様子の姫。いや、姫にしてみれば水の外も中も、部屋を出入りするみたいなものなのだろうけど。いきなり水の中に引っ張り込まれるなんて、いくら息ができるからって済む問題じゃないのである。

ふわふわとした泡に包まれながら、私たちはゆっくり水底に足をつける。

「わあ……」

思っていたよりもずっと湖は深く、月明かりもまるで届かない。今日でこれなら、新月の夜なんかはとても奥まで見通せるものではないだろう。

特段水が濁っているわけではないようだけれど、カボチャのランタンの薄明かりではほんの少し先を見通すこともできず、夜目を凝らしても青黒い鉛のようにわだかまる闇

洋が広がるばかりだ。

姫の泡があるから呼吸に不自由はないものの、今にも押し潰されそうな圧迫感が、わずかばかり息を荒くさせる。

「ちよつとくらいなら平気なはずだけど、あんまり暴れると破れちゃうから、気を付けてね」

おっかなびつくり泡をつついていた蛭奇があわてて手を引つ込める。私も万が一のことがないよう、手足の爪を念入りに引つ込めておくことにした。水深何十メートルでいきなり水の中に放り出されるのは勘弁してもらいたい。

「じゃあ、ちよつとついてきて」

姫の先導に合わせて、湖の奥から大きなハクレンたちが姿を現し、私たちの泡をそつと頭で押し始めた。ふわふわと押されながら進む隣で、私はふと神妙な顔の蛭奇に聞いてみる。

「ねえ、あんたつて水の上まで首伸ばしてたら溺れないんじゃないの？」

「……そりゃそうだけど、息ができるのはその頭だけよ。体だけ水の中にあつても何にも見えないし聞こえないし。だからつて、首切り離しちやたらますます何もできないし」

「あー。そう言えばそうね」

ろくろ首もいろいろと面倒くさいものだ。しばらく進むとやけに水底がでこぼこしているところに辿りついた。地面が入り組み、大きく盛り上がった岩棚や谷底、大小の洞

窟のようなものが口を開けている。岩の亀裂を除きこもうとした私は、噴き出してくる水流に泡がぶるぶると波立つのを見て慌ててその場を離れた。

姫によると、こうした地形が湖の底にはたくさんあるらしい。霧の湖はもともと火山の爆発のあとにできたもので、広さの割にやけに深いのも、大昔の溶岩が流れた名残なのだから。

「ここから先はずっとこんな感じなの。もしかしたらヌシ様もどこかに隠れてるのかもしれないけど……」

「確かにこれを探すのは骨が折れそうだわ」

じつとあたりを見回して思わず吐息。姫の泡からごぼりと気泡が溢れ、水面に昇っていく。

複雑に入り組んだ岩場を睨み、腕組みをしていた蛭奇は、ふむと首を捻り、

「……ねえ姫、この泡、もつとたくさん出せる？」

「うん」

答える姫に頷いて、蛭奇は身体から首を切り離した。ふわりと浮かんだ首のすぐ下、マントの襟奥からよきんと新しい首が生えてくる。それを6度繰り返し、蛭奇は都合7つの首を胴体から分離させた。それぞれの首が姫の作り出した泡に包まれて、水底に散ってゆく。

「よし」

蛭奇の首が一齐に瞳を見開くと、あたりに輝きが満ちた。ろくろ首の目から放たれた

怪光線が闇の中を切り裂いて、水底の岩山に複雑な影を落とす。カボチャのランタンの明りなど比べ物にならない。

「これで手分けして探してみよう。姫はいちばん右の、影狼はそっちのについて行つて」
「わかつたわ」

「了解」

ふわふわと寄つて来た首と合流し、私たちはあたりを探し始めた。けれど、闇に沈む水底は鋭く深く入り組み、岩場の足元は姫の泡に包まれていてなお不安定だ。ぽかりと口を開けた亀裂は底を見通すこともできず、間違つて入り込んでしまったら無事に出てこれるか怪しいものだ。時折、亀裂から噴き出す水流に泡が揺れ、私はそのたびに肝を冷やした。

穴倉を這い出して来る沢蟹や鮎とも睨めつことを繰り返し——半刻ばかり探し回つてみたものの、結局ヌシの姿どころか手がかり一つ見つけることもできず、探索は徒労に終わった。

姫の泡も限界らしく、全員くたくたになつて水の上に戻る。

「ふあっ……」

ぱちんと弾ける泡とともに水辺に上がり、少しくらくらする頭を押さえて深呼吸。長時間酷使された蜚奇の頭たちはいっせいにぐったりしていた。ちよつと連続首切り殺人現場みたいで気味が悪い。

「うーん……これじゃ駄目かもね。ヌシの方から会いに来てくれるんでもなければ、

見つけられるかどうか……」

「あれだけ人間が押しかけてきて、捕まえられない理由も良く分かったよ」

姫の言葉以上に、この霧の湖の探索は一筋縄ではないかないようだ。そもそも、けっこの長くここに住んでいる姫でさえ、ヌシの姿は新月の日以外には見たこともないというのだから、迷いの竹林のように距離や深さも違う異界に繋がっているのかもしれない。

「うーん。でも、やっぱり、人間が大勢押しかけて来るのはどうかしたいなあ」

うなされている蜜奇の頭の一つを抱えて、その頬をつんつんとつつきながら、姫。余所者の私たちと違って姫はここが棲家である。そこが人間たちに夜な夜な荒らされているとなれば、簡単には妥協できないわけだ。

私と蜜奇は顔を見合わせ、くすりと笑い合う。

「……しょうがないわね、一肌脱ぎますか」

「だね」

困ったときはお互い様。ほかならぬ姫の悩みとあらば放っておけない。相互互助をモットーとする、草の根妖怪ネットワークの定番である。



かくして、私たちは方針を変更。夜釣りにくる人間たちをターゲットに定め、彼らを追い払うことにした。

方法はいたってシンプルである。まず姫が夜でも見通しのいい浅瀬を泳いで人間たちの注目を集め、自慢の歌声を披露。彼らが姫の歌声に聞き惚れているところへ変身した私が森の中から飛び出して、浅瀬を蹴立ててひと暴れ。もし釣果を上げているようなら、さりげなく魚籠の中身をひっくり返して湖の中へ。

そうして、狼の吠え声に肝を潰して逃げ出した人間の先に、夜釣り客や夜鳴き蕎麦屋に扮した蛭奇が待ち伏せをして出迎える。あとは震える彼らに適当に話を口わしてから、首を伸ばして『ほう、そいつはこんな奴かい』の定番コースだ。

古典的だなあとは思ったけど、暗い霧の湖というロケーションが良かったのか、夜釣りに来る人間たちには面白いように効いた。湖のヌシという不思議に挑もうとする連中だ、もっと肝の座ってる奴らだと思っていたのに。

腰を抜かし悲鳴を上げては我先に逃げだし、怯え震える彼らの背中を眺めるのは、これでなかなか悪くはない。

「……これで15人か。けっこう来るね」

蛭奇はけふ、と満足そうにお腹をさする。ろくろ首は人の恐れを食べるタイプの妖怪だが、普段からあまり驚かし慣れてないのか、けっこうな小食だ。

「あんまり何度もやりたくないのよねー、どんどん毛が伸びちゃうし」

一方の私は袖の内側をさすりながら溜息。狼になって本能のままに駆け回る事自体は気分はいいんだけど、後の毛皮の処理などのことを考える憂鬱な気分が晴れないのであった。

……まあ、気分的な問題以外にも、被害が常習化して噂が里に広がり、巫女を呼び寄せかねないという問題もある。一度や二度の騒ぎくらいなら、たまたま起きたことだと言い逃れもできるはずだけれど。

そもそも、月のない夜に里の外にやってくる人間なんて襲ってくださいと言ってるようなもので、そこまで律儀に見逃してやる義理はないはずなのである。一つ問題があるとするれば、そんな理屈が巫女に通じるとは思えないこと。

「その場凌ぎなのはわかってるけど……うーん。どうすればいいのかなあ」
「やっぱり、ヌシに会えないことには話が進まないんじゃない？」

頭どうしで顔を見合わせつつ、蛮奇が姫を励ます。あまりうかうかしていたら吸血鬼の潜水艦だつて完成してしまふだろう。なにしろ設計担当は河童たちだ。安全性や耐久性なんで二の次でいきなり実戦投入してくるかもしれない。銀色シートの奥で日ごと大きくなる工事音に湖を根城とする妖精たちも気が立っているようで、先日はやんちゃな水精が仲間を引き連れ、紅魔館に乗り込んでメイドに撃退されていた。

「うーん……」

そろって頭を捻ってみるも、妖怪が顔をそろえたところで文殊の知恵とはいかないのであった。

「頭数だけなら10個は軽く超えてるんだけどねえ」

「船頭多くしてなんとやらね」

——そんな苦悩の日々があっけなく終わりを告げたのは、それから三日後のことであ

つた。

「二人とも！ 聞いてくれ！」

息急き駆けてきた蛮奇は、私と姫が興じていた花札の卓を吹き飛ばし（負けが込んでいたので切り上げる丁度いいタイミングではあった）、私たちに詰め寄ってくる。

「いったいどうしたの？ 蛮奇ちゃん」

「分かったかもしれないわ。湖のヌシの居場所が！」

「なんですって!?!」

姫はがばつと湖を飛び出し、蛮奇に飛びついた。尾びれを捻ってバタバタと跳ねながら、蛮奇に身体ごと圧し掛かる。湖に引き込まれそうになった身体から、蛮奇は慌てて首を切り離して宙に逃れた。

「お、落ち着いて、姫！ あくまで聞いた話なんだけど……」

蛮奇は私たちとは違い、人里の中で人間に交じって暮らしている。ろくろ首として、人間の中に溶け込んでいるほうが効率よく人を驚かせることができるからだ。人里にはそれなりに知り合いもあり、食堂のバイトなどの日雇いをして結構いい暮らしをしているらしいのだが——そうして出入りする飲み屋のひとつで、蛮奇はある話を聞いたのだという。

噂の主は最近里でよく見かける仙人である。博麗神社の地下に住み着いた霊廟の連中ではなく、山のほうに庵を結んで動物たちを保護している隻腕の仙女だ。

彼女が飲み屋で白黒の魔法使いや守矢神社の巫女と同席し、そこでいろいろと話をし

ているところに出くわしたのだという。こっそり聞き耳を立てる蜜奇に、彼女たちは気づく様子もなかった。

「話の大半は、博麗の巫女の修業がなっていないとかそんな話だったけど……」

「あいつもあんまり人のこと言えなそうな気がするんだけど」

華扇は普段から買い食いやら食べ歩きを常としていて、人里の食堂や茶店に立ち寄る姿が良く知られている。私も辻で買い食いをしているのを見たことがあった。

仙人というのは現世への欲望を断つて修業すると聞いたことがあるけど、あの様子を見る限りあまり真面目な仙人には思えない。

「まあそれはこの際どうでもよくて、そのあとの話なんだけど——」

声を潜める蜜奇に私たちも額を寄せ合い、説明を聞くことしばし。

私たちはその日の夜、そろって湖の底へと向かうことにしたのだった。



前回と同じく姫の泡に包まれて、水底を慎重に進んでゆく。

「——こっちな」

先導するのは蜜奇と彼女の首たち。どうやら場所については何か心当たりがあるらしかった。ふわふわと漂う蜜奇の首が、次々に光線を放つては、薄暗い水の底を切り裂いてゆく。

進行方向に聳える不気味な水底の岩を迂回し、足元に開いた大きな亀裂をゆつくりと超えて、黒々と開いた洞窟を潜り抜ける。揺らめく水底の岩棚に、水草が絡みつくように揺れている。

「……ねえ蛮奇、どこまで——」

どれくらい歩いたろう。いい加減くたびれたところで私が声を上げた瞬間、ごぼりと大きな泡が揺れた。

巨大な影が眼前をよぎったのはその瞬間だった。

「——ッ!？」

ちっぽけな人狼の本能は、迫る窮地に対し逃走よりも反撃を選んでいた。無意識のうちに振るった爪が、私を包んでくれていた泡を突き破る。頑丈に思えた泡はあっけなく弾けて消え、私は水深30メートルの水底にいきなり放り出された。

「がぼっ……!!」

前触れなく、喉に鉛が押し付けられたみたいだった。巨人の足に押し潰されたみたい
に胸がへこみ、肺から空気が残らず絞り上げられる。堪えようとしても口が、喉が言う
ことを聞かず、開いた口からがぼりと泡が吸い上げられるように吐き出され、ゆらゆら
揺れる黒い水面に向かつて登ってゆく。

パニックになって暴れる四肢は、しかし重く冷たい水をろくに掻き分けることもでき
なかった。手足は猛烈な水圧に押し潰されんばかりに引きつり、全身の骨が軋みを上げ
る。

鼻も耳もまったく利かない深い水の中、上下すら分からなくなつて必死にもがく私を、薄暗い水の底から伸びた怪しげな腕が背後から絡めとつた。

「かげろーちゃん！」

がぼり。大きな泡の音が耳元ではじけ、姫の叫びがきいんと耳を震わせた。猛烈な力で肩が引き寄せられたかと思うと、整つた姫の頤がすぐ間近にあつた。

そうしてようやく、私は姫に唇を吸われているのに気づく。

「んくっ」

姫が喉を動かすと、喉と肺を塞いでいた水が勢いよく吸い出される。咳き込む私を抱き寄せるようにして、姫はふくりと口を膨らませ、水の中に新しい泡を作つて私の身体を包んでくれる。

「つ……か、は、つ」

再度泡に包まれ、濡れた髪を払うこともできないまま新鮮な空気を求めて肺が暴れる。上下する胸を押さえ、目に涙まで浮かべてえずきながら、私は呼吸を繰り返した。

「——よかった。かげろーちゃん、大丈夫？」

「……なんとか」

いやはや、とんだ醜態だつた。なにが人狼か、みつともないつたらありやしない。

尻尾をくるるんと丸めて逃げ出したくなるのを堪え、赤面する頬をこしこしと擦つて姫にお礼を言う。姫は、伸ばした手で私の身体を抱き寄せて、ほっと安堵の表情をうかべた。

「ひゅーひゅー」

やる気のない口笛に、私たちは慌ててその場を離れる。

「まったくお熱いことで」

少し離れた場所で、蛮奇は肩をすくめていた。良く見ると耳が紅い。恥ずかしい思いをしたのはこっちだというのに理不尽だ。

「えーと。まあ、乳繰り合ってるのはさておいて」

「してない！」

「してません！」

抗議の声もどこ吹く風。蛮奇はひらひらを手を振って、岩棚の一角を示して見せた。
「ちよつとごたごたしたけど、この湖のヌシってのはこよ。……ほら」

蛮奇の首が目から怪光線を放ち、その一角を照らし出す。入り組んだ岩盤、積み重なった大岩の中に、ごろりと転がる青い輝き。

それは、一抱え位もある大きな寶石の原石だった。色合いはエメラルドのように青く澄み、自ずからほんのりと輝いている。姫が良く見せてくれる、湖の底で拾った綺麗な石コレクションと比べても、なお目立つ美しさだった。

「これ……っ!？」

呆然と声を上げた姫が、思わず袖で口元を覆う。

水底に沈む古代の原石——その中を、くると泳ぐ魚影が一つ。

「これがヌシの正体さ」

泡越しにそつと石の表面を撫で、蛮奇は言う。

彼女の話によれば、これは魚石——中に生きた魚が住むという石であるらしい。

「どういう経緯でできるのかまでは知らないけど。こういう不思議な石がたまに見つかるらしい。土の中に埋まった化石が、生き返った後だとか言われてるわ。何もしなくても、自然と水気に満ちて、中から水が染み出してくる石だとかって話もあったかな。……中に住んでる魚が透けるように薄く表面を削った石は高く売れるんだって」

博麗神社の巫女がこの魚石をみつけて、神社で見世物にしようとして失敗したというのが、居酒屋で仙人の語った一部始終であった。

蛮奇はおもむろに目を閉じて光線を止め、泡の中に連れてきたカボチャのランタンにマントをかぶせる。

とたん、あたりには深い闇が満ち——そのなかに、青い輝きが浮かび上がった。

「この魚石の中の魚の影が、明りのない新月の中では湖の水面に浮かび上がってくるのが、人間たちの間で噂のされる主の正体ってわけ。月が出ている時にはこの淡い輝きは掻き消されちゃって湖面までは届かないんじゃないかな。

もしかしたら、明りのない曇りの時なんかにも見えてはいたのかもしれないけど、天候が悪くて風で水面が揺れたりすれば確認は難しいと思うわね」

エメラルドの輝きの中にくるりくるりと身を躍らせる魚影。その黒い影が、エメラルドの輝きに包まれてあたりを行き交う。私達はただただ、呆気にとられてそれを見つめるだけだった。

「魚石は長い時間をかけて、中に住んでいる魚が龍になるとか、そうすると割れて天に上るとかそんな話もあるんだって聞いたことがあるわ。……だから、これがヌシだつても間違つてはないんじゃないかな」

「素敵！」

姫は両手を組み合わせ、目をキラキラ輝かせていた。寶石好きの姫にしてみれば、まさに白馬の王子さまみたいな憧れの存在かもしれない。

「ありがとう蛭奇ちゃん！ かげろーちゃんっ！ ねえ、ヌシ様、聞こえますか…!?」
今にも飛びつかんばかりのテンションですごいすごいと繰り返す姫に、私と蛭奇は顔を見合わせて苦笑した。



……さて。この話は大体こんな顛末でおしまいになる。

そのあと特に何かがあったわけではなく、今もヌシの噂も夜釣りの人間たちも後を絶たない。人の噂も何とやらで、随分数は少なくなったけど。

姫は念のため、ヌシの住む魚石の場所を移動させ、湖の主の正体は私たちの間だけの秘密になった。誰かに言いふらすようなものじゃないし、新聞になんて嗅ぎ付けられたら一大事だ。騒ぎが大きくなれば今のお茶会だつて開けなくなってしまうかもしれない。それに、湖に格の高い妖怪が住んでいるということ自体は悪い話ではないのだ。そい

つが乱暴だったり五月蠅くなければなお良い。ヌシの存在が明らかになったことで、むしろ湖に住む魚たちの結束は増しているようだった。

そういえば、吸血鬼の潜水艦は、結局よくわからないうちに頓挫していた。

乗り込んだ吸血鬼が乱暴な操縦を強要し、氷精と無茶な弾幕をしたのが原因だとかいう話が天狗の新聞に載っていた。その記事の最後で吸血鬼が諦め悪く二番艦の竣工を宣言していたので、そのうちまたひと騒動あるだろう。

その時は今度こそ、私たちも迎撃に出なければいけないかもしれない。

あとは……姫の話の中に、最近の主の様子が混じったり、ヌシの住むエメラルドを磨いたときに出る破片が新たに宝石コレクションに加わったとか、そんな感じだ。まあ、要するに、いつもの通りのごくごく普通な、私たちの日常である。

【奥付】

「吞舟の魚は湖水に游がず？」

初版 平成27年9月27日

輝く花の夢

発行 オルハザカサンパンチ 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 あかがねおりは 銅 折葉

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。





折葉坂三番地

著：銅おりは／折葉坂三番地
<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>

表紙：うー☆みん
<http://www.nicovideo.jp/user/1674336>